

59年度日帰り人間ドックの成績から

——特に入善地区の分析——

厚生連総合検診センター 小川 忠邦, 阿部 修平
松井 規子, 林 隆恵
中井 陽子, 岸 宏栄

59年度滑川病院農村検診センターにおける日帰り人間ドックの受診者は3,325名(男1,533名,女1,792名)で,前年度より700名,26%増加した。これは検診に対する関心の高まりを示すもので,大変喜ばしいことである。いうまでもなく検診は,がん,脳卒中,心臓病など成人病の早期発見,予防を目的として行なわれるもので,中でもがんは年々増加が著しく,特に富山県のがん死亡率は全国のトップクラスにより,なお一層の受診者増が望まれるところである。

さて,ドック検診によるがんの早期発見は,それほど容易なものではなく,検診側,受診者双方の並々ならぬ努力が必要であるが,今後さらに検診の成果をあげるためには,①検診の精度を高めるべく検診側は常に努力し,ダブルチェックシステムなどをとり入れて見落しのないようにする。②新しい検査方法や検査機器を積極的にとり入れていく。③がんの推移に対応して,例えば増加の著しい肺がん,肝がん,大腸がんなどのチェック体制を整える。④二次検診(精密検査,再チェック)をもれなく実施するようになる。そのため一次,二次総合検診体制へのシステム化が必要になろう。⑤要経過観察の中からがんが発見されることがしばしばあるので,経過追求を忘れないよう指導していく。⑥検診の能率化のために,例えば大量喫煙者の肺がん検診のように,予備調査によって高危険群をチェックし,重点的にかん検診を進めていく。などが今後重要なポイントになるとと思われる。

59年度から以下のように,検診内容や判定方法の一部変更を行なった。

- (1) 新たにとり入れた検査項目
 - 尿アミラーゼ
 - HDLコレステロール
 - 血液像—白血球数3,000以下及び9,000以上に実施
 - 尿沈渣—尿蛋白及び潜血陽性者に実施
 - α -フェト蛋白—HBs抗原陽性者に実施
- (2) 中止した検査項目
 - RAテスト
 - 視力測定
 - 便虫卵
- (3) 標準体重表は桂法から松木式に変更した。
- (4) 検診成績,総合判定,指示の記載をすべて漢字に変更し,みやすくした。
- (5) 成績表を,内容の変更に伴って全面的に改めた。同時に自覚症状,既往歴,過去の検診成績,現症,飲酒・喫煙歴なども記載できるようにした。
- (6) 総合判定,指示事項も全面的に変更した。特に指示事項はきめ細かく記載するよう配慮し,さらに訴えの強い自覚症状もとりあげて,適切な指示を与えるよう努力した。

以上(4)~(6)の実施は,準備に時間がかかったため,10月以降となった。従って60年度以降は一貫した判定区分で評価でき,コンピューターによる詳細な分析も可能となるはずである。

59年度実施した人間ドックの中から、胃がんをはじめ肺がん、卵巣がん、甲状腺がんなどかなり早期の状態で発見され、それなりの成果を挙げ得たと思っているが、思わぬ人に思わぬがんが発見されたケースもあり、検診担当者としては宿命とはいいながら、やはり冷や汗ものであった。今後もさらに検診の精度を高め、受診者の信頼を裏切ることのないよう努力していきたい。

さて今回は、総受診者 3,325名のうち 956名、28.8%を占めた入善町農協地区について検診結果をまとめたので以下に報告する。受診者数が多いので、一つのまとまった傾向を示していると思われ、県下農家組合員の代表として、その健康状態の一断面ととらえることができるであろう。入善町は、町当局の熱意と協力により、町の老人検診と当センター人間ドックとをうまくタイアップさせることによって、前年度より一気に3倍近く受診者を増やした。事後指導についても町の保健婦と当センターの保健婦とが一体となって協力して行っており、今後の成人病検診の一つのモデルケースとして評価できるであろう。

(1) 受診状況

表1-1に性別、年代別の受診状況を示す。男429名(44.9%)、女527名(55.1%)、40~69才が85.4%と大部分を占めた。表1-2は受診回数を示したもので、3分の2が初回受診であった。

表1-1 年代別・性別受診状況

年代 \ 性別	男	女	計 (%)
29才以下	6	3	9 (0.9)
30 ~ 39	56	56	112 (11.7)
40 ~ 49	115	134	249 (26.0)
50 ~ 59	137	226	363 (38.0)
60 ~ 69	103	102	205 (21.4)
70才以上	12	6	18 (1.9)
計 (%)	429 (44.9)	527 (55.1)	956(100.0)

表1-2 検診受診回数

回数 \ 性別	男	女	計 (%)
1回目	252	360	612 (64.0)
2回目	76	89	165 (17.3)
3回目	53	52	105 (11.0)
4回目	26	17	43 (4.5)
5回目	19	7	26 (2.7)
6回目	3	2	5 (0.5)

(2) 総合判定

前述のように、前半(4~9月)と後半(10~3月)とでは判定内容が異なるため別々の表に示したのが表2-1と表2-2である。しかし大部分は前半に実施したので、以下の各項目別の判定は、前半の判定方法に従って行ない、それぞれ年代別、男女別にまとめたものである。総合判定の上からは男女差は特にみられなかった。

(3) 呼吸器

表3に示す通り異常のみられた者は4.6%で男性に多かった。要観察の大部分は過去の結核や胸膜炎によるもので特に問題はない。要治療も喘息や気管支炎で治療中の者ばかりである。問題は要精密の大部分を占める肺異常陰影の11名であるが、今のところ明らかに肺がんと判明した者はいないようである。

表 2-1 年齢別総合判定結果

(59.5.26-59.9.26)

	20~29		30~39		40~49		50~59		60~69		70~		計		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
異常なし	3	0	16	11	19	21	18	13	10	5	2	0	68	50	118
差支えなし	1	1	3	10	10	14	7	18	3	4	0	0	24	47	71
要経過観察	2	0	10	16	33	41	31	61	20	29	2	2	98	149	247
要精密	0	1	21	10	35	37	53	83	41	45	3	2	153	178	331
要治療	0	1	2	3	12	17	19	34	21	15	4	1	58	71	129
合計	6	3	52	50	109	130	128	209	95	98	11	5	401	495	896

表 2-2 年齢別総合判定結果

(59.10.1-60.3.31)

	20~29		30~39		40~49		50~59		60~69		70~		計		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
異常なし	0	0	0	1	2	0	0	2	1	0	0	0	3	3	6
差支えなし	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0	3	3	6
要再検	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0	1	2	3	5
要経過観察	0	0	0	3	2	1	2	4	2	2	1	0	7	10	17
要精密検査	0	0	3	1	0	1	3	5	2	1	0	0	8	8	16
要治療	0	0	0	1	1	0	1	3	0	1	0	0	2	5	7
治療中	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	3	0	3
合計	0	0	4	6	6	4	10	16	7	5	1	1	28	32	60

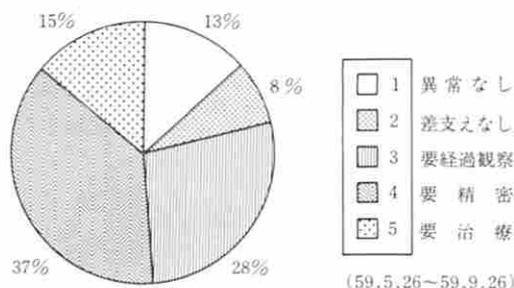
(4) 高血圧

WHOの判定基準に従い、さらに年齢や病歴などを考慮した上で判定した高血圧及びその疑は表 4-1、表 4-2 に示すように 206名 (21.5%) で、前年度よりやや増加した。しかしこのうち3分の2は一時的な血圧上昇が軽症高血圧 (最小血圧95~104 mmHg) に属する者である。一方要治療とした者は70名 (7.3%) で、そのうちの大部分62名は治療中であった。

(5) 心疾患

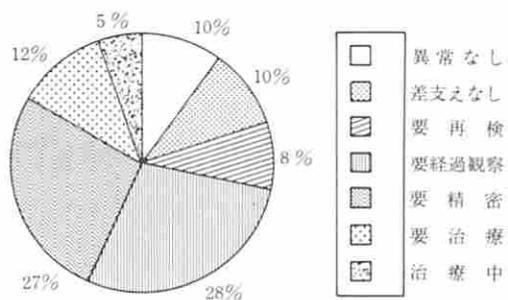
主として心電図の上から判定したもので表 5 に示す。異常所見があり経過観察、精密ないし治療を要する者は20%を超え、前年度より著しく増加した。そのうち大部分を占める要観察者の中には、左室負荷ないし左室肥大の所見を有する者が多く、原因

図 1-1 総合判定



(59.5.26-59.9.26)

図 1-2 総合判定



(59.10.1-60.3.1)

表3 呼吸器

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29才以下	6	3								
30～39	53	56	1		1				1	
40～49	112	132			2	1	1	1		
50～59	122	219	1	2	10	2	3	1	1	2
60～69	87	97	4		7	4	4	1	1	
70才以上	10	5	1	1	1					
計	390	512	7	3	21	7	8	3	3	2
総計 (%)	902 (94.4)		10 (1.0)		28 (2.9)		11 (1.2)		5 (0.5)	

表4-1 血圧区分

	男			女			計		
	～139 ～89	140～159 90 ～94	160～ 95～	～139 ～89	140～159 90 ～94	160～ 95～	～139 ～89	140～159 90 ～94	160～ 95～
29才以下	6			3			9		
30～39	49	6	1	54	1	1	103	7	2
40～49	84	20	11	113	10	11	197	30	22
50～59	96	24	17	158	46	22	154	70	39
60～69	61	18	24	55	29	18	116	47	42
70才以上	7	3	2	1	3	2	8	6	4
計 (%)	303 (70.6)	71 (16.6)	55 (12.8)	384 (72.9)	89 (16.9)	54 (10.2)	687 (71.9)	160 (16.7)	109 (11.4)

表4-2 高血圧

	異常なし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	6	3						
30～39	53	54	2	2	1			
40～49	98	116	10	11	2	3	5<2>	4<2>
50～59	106	171	17	26	1	9	13<13>	20<18>
60～69	64	67	19	20	5	5	15<14>	10<10>
70歳以上	9	3	1	1		1	2<2>	1<1>
計	336	414	49	60	9	18	35<31>	35<31>
総計 (%)	750 (78.5)		109 (11.4)		2727 (2.8)		70 <62>	(7.3)<6.5>

< >の実数は血圧治療中の者

疾患のない場合は、肥満、重労働、大量飲酒、年齢などの要因が考えられ、日常生活には大きな支障はないと思われ、心疾患が特に増加したものではないと考えられる。しかし、一方心電図の上から推定される心肥大などの高血圧性心疾患、虚血性心疾患は重要で、心臓病が増加しつつある現在、嚴重な経過観察や機会をみての精査が望まれる。

(6) 眼底

表6に示す通りで、異常者の大部分は眼底出血疑で要精査となった者である。

(7) 腎、泌尿器

検尿は尿沈渣所見も考慮して判定した結果、尿蛋白陽性者は表7-2に示すように27名(2.8%)、尿潜血陽性者は表7-1に示すように76名(7.9%)で、特に後者は女性に多くほぼ前年と同じ傾向を示した。これは尿路感染、婦人科疾患、腎下垂、前立腺疾患などが主な原因とみられるが、原因不明の場合も少なくないようで大きな問題はないと思われる。なお、腎機能障害を示した者はみられなかった。

(8) 尿酸

表8に示す通り、高尿酸血症は21名(2.2%)にみられ、すべて男性で前年度と同様であ

表5 心疾患

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	6	3								
30～39	52	52			4	3		1		
40～49	98	119	1	1	15	9		3	1	2
50～59	109	152	3	2	22	56	2	6	1	10
60～69	68	60	3	2	29	29	1	3	2	8
70歳以上	7	2			3	4	1		1	
計	340	388	7	5	73	101	4	13	5	20
総計 (%)	728 (76.2)		12 (1.3)		174 (18.2)		17 (1.8)		25 (2.6)	

表6 眼底

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	6	3								
30～39	55	56					1			
40～49	110	130					5	2		1
50～59	128	221	1		2		4	5	1	
60～69	101	100					1	1	1	
70歳以上	11	6								
計	411	516	1		2		11	8	2	1
総計 (%)	927 (97.4)		1 (0.1)		2 (0.2)		19 (2.0)		3 (0.3)	

表7 腎・泌尿器

表7-1 尿潜血

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	6	3								
30～39	53	54				1	3	1		
40～49	112	123		1		5	3	5		
50～59	131	191		2	1	7	5	25		1
60～69	95	90		1	3	2	5	9		
70歳以上	12	6								
計	409	467		4	4	15	16	40		1
総計 (%)	876 (91.6)		4 (0.4)		19 (2.0)		56 (5.9)		1 (0.1)	

った。このうち50才以下は15名で男性の9.3%、50才以上は6名2.4%と比較的若年者に高率であった。肉食嗜好に関係があるものかもしれない。

(9) 血清脂質

血清総コレステロールないし中性脂肪の高値を示す高脂血症については表9に示す通りである。男女計166名、17.4%で、前年度より増加した。若年男性に多いのは飲酒による高中性脂肪血症、中年以後の女性に多いのは肥満の影響が推定される。

(10) 糖代謝

空腹時血糖 110mg/dl 以上を異常として、表10に示すような結果を得た。31名、3.2%に異常を認め、実際にその殆んどは糖尿病ないし耐糖能異常者であった。なお肥満者の場合は、空腹時血糖が正常であっても糖尿病ないしそれに準ずる異常を呈する人が多いので、30%以上高度肥満者に対しては、改めて糖負荷試験をうけるよう指示した。

(11) 血液

貧血は表11-1に示す通り9.6%にみられ、うち85%は女性で、前年度と同じ傾向を示した。要観察とした者は軽度の貧血であり、中等度以上の貧血を示した者または治療中の者は要精査ないし治療とした。なお多血症及び白血球の増加、減少は若干みられたが、特に大きな問題はないと思われた。

表7-2 尿 蛋 白

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	6	2								1
30～39	56	55						1		
40～49	113	131			2	3				
50～59	131	221			5	2	1	3		
60～69	96	101			4	1	3			
70歳以上	11	6			1					
計	413	516			12	6	4	4		1
総計 (%)	929 (97.2)				18 (1.9)		8 (0.8)		1 (0.1)	

表 8 高尿酸血症

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	6	3								
30～39	48	56			8					
40～49	108	134			7					
50～59	134	226			3					
60～69	100	102			3					
70歳以上	12	6								
計	408	527								
総計 (%)	935 (97.8)				21 (2.2)					

表 9 血 清 脂 質

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	5	3			1					
30～39	43	52			13	4				
40～49	93	121			23	13				
50～59	115	177			22	49				
60～69	90	75			13	27				
70歳以上	12	5				1				
計	357	433			72	94				
総計 (%)	790 (82.6)				166 (17.4)					

(12) 上部消化管

表12に示す通り、944名が胃透視をうけ、要精査は139名14.7%ではほぼ前年度と同様の率であった。要治療の大部分は潰瘍などで治療中の者である。精検受診者は108名、74.5% (60.4.1現在)で、その内訳は異常なし(胃炎を含む)は57名(52.8%)であるが、胃がん5名、胃潰瘍17名、胃ポリープ16名、十二指腸潰瘍9名などかなりの疾患が発見されている。発見胃がん5名は受検者の0.53%にあたり、うち4名が女性で、4名が早期がん、1名が進行がんであった。

(13) 検 便

検便実施者は659名(69%)で、潜血反応陽性者は表13に示すように108名(16.4%)で、全員要再検(精密)とした。糞便潜血陽性は大部分食事の影響と思われるので、今回は各受診者に、食事に対する注意事項を徹底するように配慮したため、前年度より陽性率は著しく減少した。大腸がんは年々増加しつつあるが、現状では十分な検診体制をとることは困難なので、検便によってスクリーニングを行ない、再検または精検を行なって異常の有無を確認することが必要である。

(14) 肝 機 能

表14-1に示す通りである。要観察は87名(9.1%)ではほぼ前年度と同じく、やはり男性に圧倒的に多いアルコール性肝障害

表10 糖代謝

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	6	3								
30～39	55	56					1			
40～49	110	134					5			
50～59	134	216						9	3	1
60～69	96	99					5	2	2	1
70歳以上	10	6			1				1	
計	411	514			1		11	11	6	2
総計 (%)	925 (96.8)		1		1 (0.1)		22 (2.3)		8 (0.8)	

表11 血液

表11-1 貧血

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	6	3								
30～39	55	44			1	8		1		3
40～49	111	109			2	16		1	2	8
50～59	135	197			2	25		2		2
60～69	99	91			2	11			2	
70歳以上	9	5			1	1			2	
計	415	449			8	61		4	6	13
総計 (%)	864 (90.4)				69 (7.2)		4 (0.4)		19 (2.0)	

表12-1 上部消化管

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	6	1						1		
30～39	44	48	1		1	1	9	3		
40～49	91	114			5	3	16	16	2	
50～59	106	182			6	6	22	32	3	4
60～69	79	72	1	2	3	7	19	18	1	1
70歳以上	9	4	1				1	2	1	
計	335	421	3	2	15	17	67	72	7	5
総計 (%)	756 (80.1)		5 (0.5)		32 (3.4)		139 (14.7)		12 (1.3)	

である。要精密としたものは55名(5.8%)で前年度より著しく減少した。これはLDHの判定基準を変更したためLDHの上昇による要再検者が殆んどみられなくなったからである。この55名中23名(41%)はHB抗原陽性者である。HB抗原陽性は表14-2に示すように26名(2.7%)にみられ、前年度の4.5%より減少し、日本人の平均陽性率2～3%に一致する。前年度より減少したのは、受診者の増加によって平均的な割合に近づいたためと思われるが、一過性陽性者もあると思われ、精査によって持続陽性(大部分はHBVキャリア)を確認しておくことが是非必要である。なおHB抗原陽性者に実施した α -フェト蛋白は、全員正常範囲内であった。

(15) 膵臓

膵疾患のチェックを目的として今回より新たに尿アマラーゼ測定をとり入れた。目標はもちろん増加の著しい膵がんである。膵がんの早期発見は、精密検査によっても非常に困難であるのが現状であるが、その中で簡単でしかもある程度信頼性のあるスクリーニング法としてはアマラーゼ以外にはなく、血液よりも陽性率の高い尿アマラーゼを採用した。もちろんこれだけで膵がんのチェック方法としては不十分なことは承知の上であるが、全くのノーチェックよりも一歩でも前進して、その中から

表12-2 胃部二次検診結果

昭和60年4月1日現在

	受診者数	胃要精 検者数	精 検 者 数	精 検 受診率 (%)	胃 二 次 検 診 結 果 内 訳											
					胃 癌	A T P	胃粘膜 下腫瘍	胃潰瘍	胃潰瘍 癒 痕	胃 ポリープ	12指腸 潰 瘍	12指腸 潰瘍癒痕	12指腸 ポリープ	胃 炎	その他	異 常 な
29歳以下	男	6														
	女	2	1	0												
30 ~ 39	男	55	9	7	77.8				1		1			4		
	女	52	3	2	66.7	1			1							
40 ~ 49	男	114	14	6	42.9				3					3		
	女	133	15	13	86.7	1			1		2	1		5		3
50 ~ 59	男	137	28	19	67.9	1			3		2	4		7		2
	女	224	33	27	81.8	1	1	1	4	1	6	1		7		5
60 ~ 69	男	103	20	16	80.0		1		2			1		9		3
	女	100	17	14	82.4				1		5	1		4		3
70歳以上	男	12	2	1	50.0				1							
	女	6	3	3	100.0	1								1		1
計	男	427	73	49	67.1	1	1		10		3	6		23		5
	女	517	72	59	81.9	4	1	1	7	1	13	3		17		12
総 計		944	145	108	74.5	5	2	1	17	1	16	9		40		17

表13 検 便

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	2	2								
30～39	21	32					5	2		
40～49	55	81					17	8		
50～59	91	139					15	27		
60～69	59	57					17	15		
70歳以上	8	4					2			
計	236	315					56	52		
総計 (%)	551 (83.6)						108 (16.4)			

一例でも膵がんが発見され手術できれば、成果があったというべきであろう。500単位以上を異常として表15のように、15名1.6%に異常がみられたが、今のところ膵がんと診断されたケースは報告されていない。

(16) 甲状腺

甲状腺腫大は、表16に示すように21名(2.2%)にみられ、すべて女性であった。大部分はびまん性単純性甲状腺腫であると思われる。

表14-1 肝機能

	異常なし		差支えなし		要経過観察		要精密		要治療	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
29歳以下	5	3			1					
30～39	44	54		1	9	1	2		1	
40～49	85	123			25	7	2	4	3	
50～59	108	203		1	22	5	7	16		1
60～69	80	85			11	6	10	11	2	
70歳以上	10	5					2	1		
計	332	473		2	68	19	23	32	6	1
総計 (%)	805 (84.2)		2 (0.2)		87 (9.1)		55 (5.8)		7 (0.7)	

(17) CRP反応

表17に示すように24名(2.5%)に陽性を示したが、大部分は感冒などによる一過性の陽性であったようである。

(18) 肥満

表18のように10%以上の肥満者は男36.4%、女54.8%と女性に多い傾向がみられた。30%以上の高度肥満者も男3.3%に対し、女14.0%と肥満の程度も女性に著しかった。これを年代別

表14-2 HBs抗原陽性

	異常なし	差支えなし	要経過観察	要精密	要治療
男	415		2	12	
女	515		1	11	
計 (%)	930 (97.3)		3 ((0.3)	23 (2.4)	

表15 膵臓

	異常なし	差支えなし	要経過観察	要精密	要治療
男	420			9	
女	521			6	
計 (%)	941 (98.1)			15 (1.6)	

表16 甲状腺

	異常なし	差支えなし	要経過観察	要精密	要治療
男	429				
女	506	3	12	6	
計 (%)	935 (97.8)	3 (0.3)	12 (1.3)	6 (0.6)	

表17 CRP反応

	異常なし	差支えなし	要経過観察	要精密	要治療
男	413		1	15	
女	519			8	
計 (%)	932 (97.5)		1 (0.1)	23 (2.4)	

表18 肥満
男性

	-10%以下	-9~9%	10~19%	20~29%	30%以上
29歳以下			4	2	
30~39	2	32	13	5	4
40~49	11	54	23	23	4
50~59	10	80	30	15	2
60~69	10	59	21	9	4
70歳以上	3	8	1		
計 (%)	36 (8.4)	237 (55.2)	90 (21.0)	52 (12.1)	14 (3.3)

女性

	-10%以下	-9~9%	10~19%	20~29%	30%以上
29才以下	2	2		1	
30~39	2	29	17	2	6
40~49	6	54	38	20	16
50~59	10	95	52	42	27
60~69	6	30	22	19	25
70歳以上	1	3	2		
計 (%)	25 (4.7)	213 (40.4)	131 (24.9)	84 (15.9)	74 (14.0)

にみると、男性は40才台にピークがあり、それ以下の若年者にやや肥満傾向が目立つのに対し、女性は60才台にピークがあり、中年以降に肥満者が目立っている。これは男女の生理の違い、生活環境、仕事、食事、飲酒など色々な要因がからんでいるのであろうが、成人病の危険因子としての肥満に対する対策を考える上で参考になることと思われる。

(19) 婦人科

517名が受診し、その結果は表19に示す。有所見者が前年度より著しく減少したが、これは細胞診でクラスI~IIの子宮腺部びらんを異常なしとしたからである。要観察、精密で最も多いのは子宮筋腫で、その他卵巣のう腫、頸管ポリープなどがみられた。要治療では膣炎、子宮筋腫などがみられたが、癌は発見されなかった。

まとめ

- (1) 入善地区の人間ドックの成績からは、特に著しいあるいは特定の健康異常を示す所見はみられなかった。
- (2) 二次検診を受けた者の中から、胃がんが5名(0.53%)発見された。これはかなり高い数字である。
- (3) 事後指導の徹底や再三にわたる電話連絡等により、二次

検診受診者や経過追跡がよく行なわれるようになってきたが、まだ充分とはいえず、より一層の努力が望まれる。

- (4) 飲酒、喫煙の習慣が特に男性に目立っており、がんをはじめ肥満、高血圧、心臓病、高脂血症など成人病の引き金として無視できない。今回の人間ドックの成績においても、これらが影響を及ぼしている点も考え

図2 年齢別肥満分布

図2-1 男

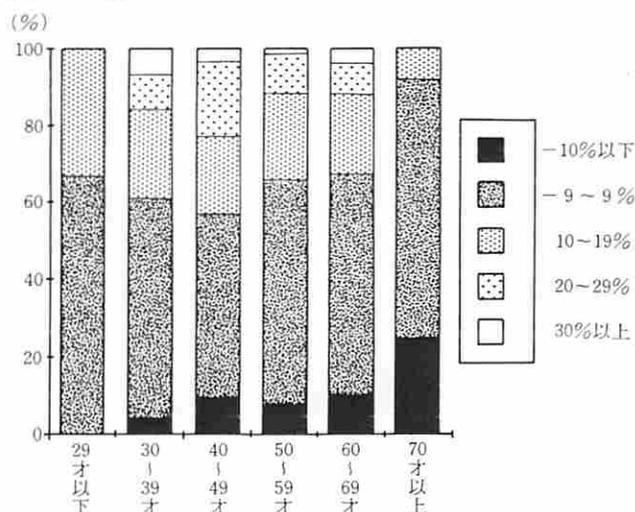
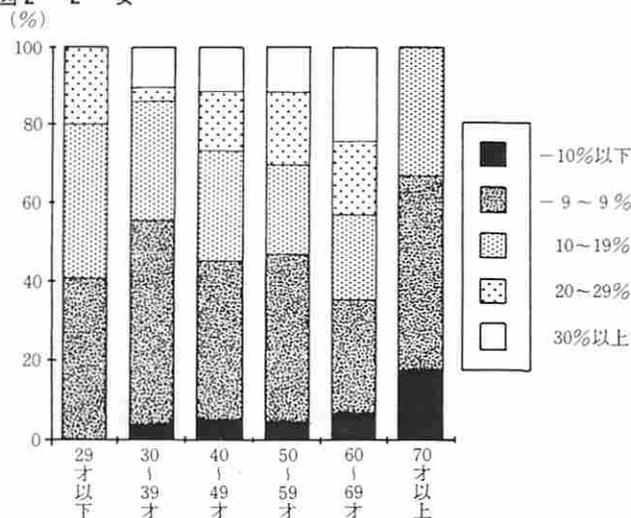


図2-2 女



られ、飲酒、喫煙は今後の成人病対策の重点目標の一つと考えたい。

- (5) 検診成績に非常に貴重な数多くのデータが集積されている。しかし現状ではこれらを充分生かすことができないのが残念である。今後はコンピューターなどを駆使することによってデータを分析し、成人病予防、健康増進、健康管理に役立てていくべきであろう。

表19 婦人科

	異常なし	差支えなし	要経過観察	要精密	要治療
29歳以下	2				
30～39	50		3	1	1
40～49	102		20	3	6
50～59	206		8	1	7
60～69	101				
70歳以上	6				
計	467		31	5	14
(%)	(90.3)		(6.0)	(1.0)	(2.7)